

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書（2024 年度採択案件）**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	やさしい日本語とまちさんぽで築く防災共生の輪
(2) 実施団体名	一般社団法人 にほんごさぽーと北海道
(3) 実施期間	2024 年 12 月 2 日～2025 年 9 月 30 日
(4) 実施国	日本
(5) 活動地域	北海道（帯広市、音更町、美幌町、千歳市）
(6) 活動概要 ①活動の背景： 北海道には約 50,000 人を超える在留外国人がいて、道内全域に散在している。多くは就労する生活者であり、在留外国人同士の交流に加え、地域日本人住民との交流も限定的である。また、北海道は地域日本語教室の空白地域としての課題もあり、在留外国人は地域の生活情報を得る機会が少ない。そのため、地域の実情や防災の重要性を理解していない場合も少なくない。2024 年 1 月発生の能登半島地震では在留外国人の避難状況が報道され、地域コミュニティの重要性が高まっている。言語だけでなく、母国での災害体験も多様な外国人であるが、地域の人々と異文化交流を交えながら相互理解を深め、地域の防災を共に学び、災害時における迅速かつ効果的な対応（自助）、連携や支援体制（共助）の構築が必要とされている。 ②活動の目標： 日頃から孤立しがちな在留外国人と地域の日本人が共に参加し、やさしい日本語とまちさんぽを通じて、相互理解の促進を図り、防災に関する知識や意識を高め、だれもが安心して参加し活躍できる居場所づくりを行う。	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容*

【多文化&防災まちさんぽ】

全2回の事業企画とし、事業は、帯広市（4月～5月）、音更町（5月～6月）、千歳市（6月）、美幌町（6月～7月）で予定通り実施しました。1回目は地域に合わせたまちさんぽコースを参考に、グループでスケジュールやミッションポイントの特徴を書いたラップブックを作成しました。外国人は母語記載も可能とし、日本人参加者は「やさしい日本語」で説明できるよう記入してもらいました。2回目はグループに分かれ、ラップブックに沿って多文化&防災まちさんぽを実施し、災害リスクや町の様子について情報収集を行いました。終了後は会場に戻り、「やさしい日本語」で交流しながら、参加者自身が収集した防災情報をラップブックに追記しました。最後は各グループから全体へ情報共有を行いました。

※まちさんぽ…防災拠点や避難所を実際に歩いて確認し、地域住民と外国人住民が交流しながら学ぶ活動です。

※ラップブック…アメリカ発祥の学習ツール、学習者自身が内容をまとめて表現できる教材形式

【防災紙芝居とやさしい日本語啓発事業】

音更町生涯学習課と連携し、やさしい日本語の普及、防災紙芝居を用いた防災への啓発活動を行いました。講座は全3回開催し、1回目は成人対象、2回目以降は親子対象に実施しました。若年層は災害時の自助共助の主たる担い手ではありませんが、親子で参加することにより、防災知識だけでなくやさしい日本語についても、親子共通の関心事になったことを確認できました。

【災害時における外国人への支援セミナー】

9月24日～26日、「災害時における外国人への支援セミナー」に参加しました。この研修に参加する意義として、「多文化&防災まちさんぽ」の成果を外部事例と照らし合わせて検証し、協力いただいた行政関係者へ共有することにより、事業終了後も協働の可能性を探ることが可能であると考えたからです。外国人の災害対応に長年携わる講師や能登半島地震での現地活動を行った講師から、多文化共生の視点、発災時、発災後における外国人支援について事例を伺いました。グループごとに実際に地域でどのような活動ができるかを検討・発表しました。

(2) 実施成果：

【多文化&防災まちさんぽ】

当初は災害（防災）のテーマは興味のある方の参加しか見込めないと考えていましたが、各報道機関に取り上げてもらったことで、各地域の関心を集めることができました。日本人参加者には「やさしい日本語」で伝えることの必要性、命に関わる場合は母語も必要だと理解が得られました。事業実施時期に、地震が頻発していたこともあり、外国人参加者にも町の防災対策を知ってもらうことができ、災害に対する不安を和らげる効果がみられました。また、報道機関に本事業を取り上げていただくことで、在住外国人に対しての情報発信について考えてもらう機会を提供できました。

参加人数：日本人（帯広市13人、音更町16人、千歳市13人、美幌町3人）

外国人（帯広市7人、音更町6人、千歳市10人、美幌町8人）

国籍（ベトナム、ミャンマー、中国、インドネシア、モンゴルほか）

取材情報：NHKにて放送（6月28日ぐるっと道東、7月31日ほっとニュース）

【防災紙芝居とやさしい日本語啓発事業】

音更町生涯学習課と連携し、やさしい日本語の普及、防災紙芝居を用いた防災への啓発活動を全3回実施しました。1回目は町の防災士が数名参加しており、「やさしい日本語」での情報発信をSNSでしてくださる方もいました。また、当団体の活動に協力したいと参加者から申し出がありました。2～3回目は小学生の親子を対象に実施しました。災害時の自助共助の主たる担い手ではありませんが、やさしい日本語の使い手になるべく、難しい災害用語の言い換え・書き換えにチャレンジしたことは、多文化・異文化理解を深めると同時に、若年層の防災意識の向上につながりました。

参加人数：1回目 対象：高校生以上 13名
2回目 対象：小学校低学年 8名（親子参加3組）
3回目 対象：小学校高学年～中学生 5名（親子参加2組）
取材情報：1回目開催分 十勝毎日新聞に掲載

【災害時における外国人への支援セミナー】

全国から42名が参加し、事前に提出した課題シートが全員に共有されました。各自治体で地域外国人の国籍、在留資格は多様ですが、上位5か国の在留資格に技能実習生を含む就労者が多いことが分かりました。自己紹介では研修内で取り組みたい課題を発表し、その課題が同じ、または近いメンバーでグループを作り、私は「避難訓練」メンバーとなりました。メンバーから自分の地域を实践地域で考えてほしいとの要望があり、提出シート内の9項目について、どのように地域住民と外国人住民が協働できるか全員で考えて発表資料を作成しました。ペルソナ設定、スケジュールなど、主メンバーの情報不足もあり明確にできなかった点もありますが、行政主体の避難訓練に参加する意義として、地域日本語教室は大きな役割があると感じました。外国人住民に対してどのような参加の意識づけを行うか、講師からのアドバイスにまちさんぽ事例も挙がり、当団体が行った事業は良い位置づけであると自信を持つことができました。研修終了後は、参加者全体、課題発表メンバーのLINEグループがそれぞれ作られ、今後のつながりに期待します。

【その他の成果】

多くの協力が得られたことは本事業において大きな成果だと考えます。警察からの協力申し出は、事業実施の安全面だけでなく、災害時の安全啓発に対する協働の成果が得られました。また、各市町の危機対策課に依頼した地域災害講話では「やさしい日本語」で伝えることに取り組んでいただきました。今後もこのような連携が持続できるようにします。

また、今後の当団体の活動において、本事業を通じて、実施地域で外国人キーパーソンが誕生したことは大きな成果です。多文化共生の当事者である外国人キーパーソンが、地域のコミュニティづくりや災害時の情報伝達にも大きく寄与してくれるものと期待できます。

さらに、他団体の勉強会で本事業について発表する機会をいただきました。多文化&防災まちさんぽの実施や行政との関係づくりに関心が寄せられ、事業実施の波及効果を実感しました。当団体の活動について共有の場を作ってくださった「やさしい日本語有志の会」とも引き続き情報共有を行います。また、NHKの放送をみた教育関係者（町内小学校）から、出前事業の依頼を受けました。その出前授業準備として、テーマ「防災とピクトグラム」のヒアリングを実施し、その際に多文化防災まちさん

ぽに参加した在住外国人の協力も得られました。この出前授業は本事業が終了後の実施となりますが、教育関係者との長期的な関係性を継続できるよう、情報共有を行います。

（３）得られた教訓など：

【多文化＆防災まちさんぽ】

本事業を実施し、日本人も知らない防災情報が多くあることが分かりました。参加者が自然と「AEDが●●にありました」と各地域のグループLINEで情報提供したり、カムチャッカ半島地震の津波情報を「やさしい日本語」で発信するなど、事業実施後も継続した交流があることに本事業の手ごたえを強く感じています。また、本事業を実施するにあたり、各自治体の危機対策課や警察署に協力をいただきましたが、関係各所との関係構築が非常に重要であると強く感じています。

【防災紙芝居とやさしい日本語啓発事業】

音更町との連携は、地域の人的資源を活用するうえでも重要な事業となりました。子どもの参加対象者の選定、教育機関とのパートナーシップなど講座運営に課題が残りました。

【事業全体をとおして】

日頃から広報力を強化したいと考えていましたが、本事業について各報道機関に取材・掲載のご協力をいただくことができました。多くの方から「テレビ見たよ」「頑張ってるね」「応援します」とメッセージが寄せられ、活動を知っていただく機会に恵まれたことに感謝しています。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

- ・多文化＆防災まちさんぽ事業継続に向け、今回実施した４地域については、予算付けも含めて継続した企画提案を検討します。
- ・今回実施していない地域にも本事業を拡散していけるよう、情報提供を行います。
- ・災害時における外国人への支援セミナーの内容を地域に共有し、防災訓練などを通じた官民連携を図ることができるよう働きかけていきます。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

【日本人参加者の感想】

- ・地域の防災対策を実際に見ることで、町の取り組みを知ることができてよかった。
- ・自分の住んでいる町なのに、災害時に役立つ情報について、知らないことが分かった。
- ・地域の外国人と交流ができ、みんなで防災のことを勉強できて嬉しかった。

【外国人参加者の感想】

- ・地震がたくさんあって不安に思っていたが、災害の知識を勉強できて、不安がなくなりました。
- ・交流の機会を橋渡ししてくれて、本当にうれしかったです。

【協力者の感想】

- ・非常に面白く、良い取り組みだと思った。
- ・地域日本語教室にも参加させてもらいたい。
- ・災害担当者として知っているはずのことも、実際に歩くことで気づきがあった。

(2) 活動の写真



まちさんぽのミッションポイントを見つけ、
笑顔のみなさん



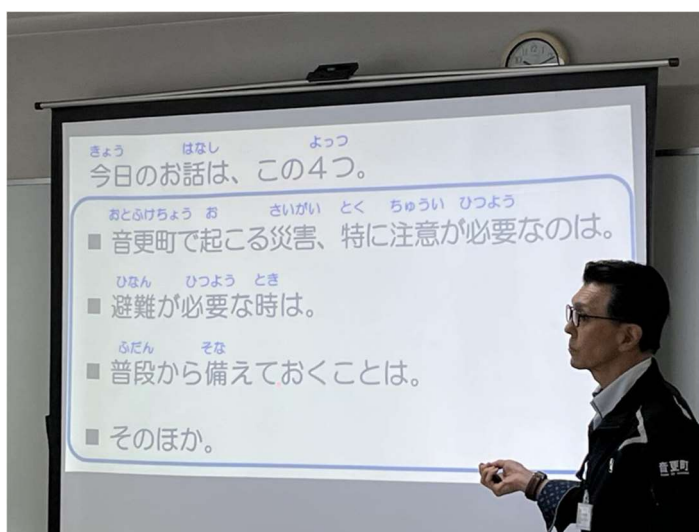
「やさしい日本語」や母語で交流しながら、
まちさんぽコースを話し合う参加者のみなさん



完成したラップブックは自分だけの防災ハンドブック



グループ毎にまちさんぽで収集した情報について話し合っている様子



音更町危機対策課推進員の防災講話は、外国人にもわかりやすい「やさしい日本語」を使用

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

常に地域や他団体との連携が団体課題として上がりますが、本事業では多くの協力を得ることができ、当団体にとって大きく成長できたと感じます。また、活動後の交流を通じて、外国人住民自身が参画できるコミュニティを求めていることがわかり、今後の当団体の活動につながる情報が得られました。

防災の視点から、やさしい日本語の活用だけでなく、災害時の様子を伝える紙芝居と組み合わせることで防災意識向上につながる新たな事業コンテンツの構想が得られました。継続した取り組みを検討します。

本来、事業の中に「事業実施地域に合わせた防災ハンドブック」の作成を予定していました。しかし、事業を進める中で「当団体が一方的に作成するものなのか」「本来は公が取り組む事案ではないか」等ハンドブック作成の位置づけを見直すことにしました。事業終了後も、どのような位置づけで防災ハンドブックを作成するか、行政との連携も視野に入れ、次の活動につなげます。